多言語分類辞典『御製五体清文鑑』の利用に関する覚書

栗林　　均

はじめに
1．『五体清文鑑』の異本と影印公刊本について
2．『五体清文鑑』と他の清文鑑の語彙項目の構成
3．『満和辞典』と『五体清文鑑』
4．『五體清文鑑譯解』について — 特にモンゴル語の表記について

はじめに

『御製五体清文鑑』（以下『五体清文鑑』と呼ぶ）は、18世紀末に中国清朝で編纂された満洲語、チベット語、モンゴル語、ウイグル語[1]、漢語の５言語対訳辞典である。本体は全36巻、約５千ページからなる大冊で、収録されている項目は18,671にのぼる。対訳辞典であると同時に、すべての項目は「天」「時令」「地」「君」「諭旨」等36の「部」と、その下位分類である292の「類」によって配列されている分類辞典でもある。

「清文鑑」という名称は、「満洲語の辞書」を意味する満洲語 manju gisun i buleku bithe の漢語訳であり、18世紀の中国清朝においては「清文鑑」の名をもつ大規模な満洲語辞典が相次いで編纂・刊行された。清文鑑には編纂・刊行の年代も、対象とする言語の数と種類も、また収録語数や表記方法も異なる数種類の辞典が含まれている。表１．は、主要な７種類の清文鑑を一覧にしたものである。それらはいずれも御製つまり皇帝（の命）によって編纂されたものであること、見出し語が意味によって分類・配列された分類辞典であること、そして満洲語を基盤としているという点で共通している。

康熙47（1708）年の序をもつ最初の清文鑑に採録された満洲語の見出し語は12,110であったが、それらは後続の清文鑑に引き継がれるとともに、あるものは新しい語彙に置き換えられ、また新しい項目と分類が付け加えられ、『五体清文鑑』に至っては最初の清文鑑の1.5倍強にあたる18,671の項目が収録されている。言語の種類も、最初の清文鑑は満洲語だけの辞典であったが、モンゴル語、漢語、チベット語、ウイグル語と、次第にその範囲が拡大された。それぞれの清文鑑では、語彙の増訂と言語の追加が行われただけでな

表1．各種清文鑑一覧[2]

	刊行年[3]	名　　称[4]	言　語[5]	項目数	本文巻数	総　綱[6]
[1]	1708年 (康熙47年)	「御製清文鑑」	満	12,110	20巻	4巻
[2]	1717年 (康熙56年)	「御製満蒙文鑑」	満・蒙	12,110	20巻	8巻
[3]	1743年 (乾隆8年)	「御製満蒙文鑑」(満洲字表記)	満・蒙	12,110	20巻	あり[7]
[4]	1771年 (乾隆36年)	『御製増訂清文鑑』	満・漢	18,654	正編32巻 補編4巻	正編4巻 補編2巻
[5]	1780年 (乾隆45年)	『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』	満・蒙・漢	13,835	31巻	なし
[6]	不詳	『御製四体清文鑑』	満・蒙・漢・蔵	18,667	正編32巻 補編4巻	なし
[7]	不詳	『御製五体清文鑑』	満・蒙・漢・蔵・維	18,671	正編32巻 補編4巻	なし

く、あるものでは語釈が付され（表1．の［1］［2］［3］［4］)、またあるものでは発音情報が加えられて（表1．の［3］［4］［5］［7］)、独自の特色が出されている。このように、清文鑑は先行する各種の清文鑑の伝統と蓄積を受け継ぎながら、形式と内容を発展させてきた。そうした中で、『五体清文鑑』は収録されている項目の数も、含まれる言語の数も最も多く、「清文鑑」の最終版として成ったものである。

筆者は、モンゴル語研究の見地からこうした清文鑑の資料的な位置づけと、それらに収録されているモンゴル語の特徴について一文を草した（栗林［2008］)。本稿は、そうした研究の中で出てきた『五体清文鑑』を利用する際に留意するべきことがらをまとめた覚書である。モンゴル語研究に限らず、『五体清文鑑』を言語資料として利用する際の一助となれば幸いである。

1．『五体清文鑑』の異本と影印公刊本について

表1．にみる7種類の「清文鑑」のうち、『五体清文鑑』以外はすべて木版本として出版されたが、『五体清文鑑』は稿本のみで、それが刻版となることはなかった。それと関連して、「序」がないため、制作（書写）された時代は詳らかでない。今西［1966：157-158］は乾隆52（1787）年以降、乾隆59（1794）年までの期間に帰せられると推定している。

現在、『五体清文鑑』の写本は北京故宮博物院に2本、大英博物館に1本蔵されている。今西［1966：160-161］によれば、故宮博物院所蔵本のうちの1本はもともと奉天故宮に蔵されていたもので、今西氏はそれぞれを北京本、奉天本と呼び、大英博物館の1本をロンドン本と呼んでいる。

奉天本については、京都大学所蔵の写真原版をもとにして東洋文庫から7函36冊の線装本の体裁で『御製五体清文鑑』と題する複製本が公刊されている。序・奥付の類はなく、刊行年の記載もないが、Poppe, Hurvitz, Okada［1964：165］には、1937年刊とある。一方、北京本の影印は、上冊・中冊・下冊の3巻本が『五体清文鑑』として北京の民族出版社から1957年に刊行され、さらに1998年に再刊されて研究者の利用に供されてきた。また、『五体清文鑑』（民族出版社、1957年）の複製本が *Wu-t'i Ching-wen Chien : A Five Language Glossary (Manchu, Mongol, Tibetan, Uighur, Chinese), First published in Peking, 1771 in 36 fascicles,* RoutledgeCurzon, 2004. として刊行されている。ただし、元の民族出版社版は上冊・中冊・下冊の3巻であるが、これは全体が9巻に分けられている。ロンドン本の影印は、現在まで公刊されたものはない。

写本としての性質上、『五体清文鑑』を利用する際には、存在している3種類の異本の校合と校訂が求められることは言を俟たない。しかし、異本のすべてが利用できないにしても、それらのうちの2種類の影印本が公刊されているという利点を活用して研究を進めることは可能でもあり、現実的でもある。

ここでは、まず公刊されている影印本を利用する際の注意点について指摘しておきたい。特に問題があるのは、東洋文庫複製本である。今西［1966：160-161］は、東洋文庫複製本について次のような欠陥があることを指摘している。

> 奉天本も戦前東洋文庫で影印出版されたが，これは【内藤湖南・羽田亨】[8] 両博士の将来された京大所蔵の写真原版によつたものである。ところがこの原版には残念乍ら欠落があつたり，写真上部の写つていない個所があつたりし，それをそのまま版にしたのは己むを得なかつたにしても，しかし錯簡の甚しいのは残念である。...

東洋文庫複製本（奉天本）を利用する上で何よりも必要なことは、こうした錯簡を具体的に明らかにして正しておくことである。以下に、これに関する筆者の調査結果を示す[9]。

東洋文庫複製本における落丁[10]

(1) 第2巻85丁裏、白紙：242（927-930）
*(2) 第4巻49丁表、白紙：405（1540-1542）
*(3) 第5巻29丁表、欠－第5巻39丁表が重複して入っている：468（1774-1777）
(4) 第6巻65丁表、欠（最終頁欠落）：686（2593-2594）
*(5) 第7巻79丁表、白紙：841（3175-3178）
(6) 第9巻76丁表、欠－第9巻76丁裏が入っている：1144（4320-4323）
*(7) 第26巻20丁裏、欠－第23巻20丁裏が重複して入っている：3617（13603-13606）
(8) 第30巻44丁表、欠－第30巻44丁裏が入っている：4198（15780-15783）
(9) 第36巻65丁表、白紙：4926（18489-18492）

田村・今西・佐藤［1966：xiv］は、「京都大學所藏奉天故宮本の寫眞乾板には，つぎのような4枚の欠落がある」と指摘して上記(2)(3)(5)(7)を挙げている（* 印を付したもの)。これによれば、それ以外の落丁は写真原版によるものではなく、複製本作成時にできたことになる。「乱丁」は次のようにさらに多い。

東洋文庫複製本における乱丁

(1) 第2巻60丁裏と、第6巻60丁裏が互いに入れ替わっている
(2) 第3巻10丁裏と、第6巻10丁裏が互いに入れ替わっている
(3) 第6巻33丁表と、第6巻35丁表が互いに入れ替わっている
(4) 第8巻57丁表と、第12巻57丁表が互いに入れ替わっている
(5) 第9巻76丁表に、第9巻76丁裏が入っている（第9巻76丁裏は枠罫のみ)
(6) 第10巻16丁表と、第10巻19丁表が互いに入れ替わっている
(7) 第10巻72丁表に、第10巻75丁表が入っている
(8) 第10巻75丁表に、第10巻73丁表が入っている
(9) 第10巻73丁表に、第10巻72丁表が入っている
(10) 第15巻11丁表に、第15巻15丁表が入っている
(11) 第15巻15丁表に、第15巻13丁表が入っている
(12) 第15巻13丁表に、第15巻11丁表が入っている
(13) 第24巻81丁表と、第24巻82丁表が互いに入れ替わっている
(14) 第30巻44丁表に、第30巻44丁裏が入っている
(15) 第30巻44丁裏に、第31巻44丁裏が入っている（第31巻44丁裏は重複)
(16) 第33巻23丁表と、第33巻25丁表が互いに入れ替わっている

以上が、東洋文庫複製本における錯簡の詳細である。これらを正すことによって、「錯簡の甚だしい」版という不安によって利用をためらう事態は脱することができる。

奉天本の写本としての信頼性は、北京本よりむしろ高いことが指摘されている。その意味で、奉天本、つまり東洋文庫複製本の利用価値は高い。これについて、今西［1966：161］は次のように述べている。

> …北京の影印本はこの点[11]対照的によくできていて、【東洋】文庫の影印本のようなまずさは1つもない。しかし満洲語について言うと奉天本は北京本に較べて遙かによく出来ている。東洋文庫の影印本は上記の通り頗るまずいものだが、原典そのものは北京本に較べて甚だ筋が通つており、北京本に頻々として見られるような誤字誤写は殆ど見当らない。

満洲語について北京本に誤字・誤写が多いという今西氏の指摘は、モンゴル語に関しても同様にあてはまる。個々の項目の誤字・誤写以外に、北京本にはモンゴル語と他の言語

の項目の対応にズレがあることを指摘しておきたい。具体的には、北京本では、他の言語の項目に対応するモンゴル語の訳語が、ページごと入れ替わっているところが１箇所、対応がズレている個所が３箇所見られる。いずれもモンゴル語だけの誤写であるが、それらを以下に列挙する。

北京本におけるモンゴル語の対応のズレ：

(1) 第１巻1648－1650頁（6219-6230）[12] のモンゴル語の訳語には、次のように別の項目の訳語が書かれている。

1648頁には、1650頁に入るべきものが書かれている（４項目）

1649頁には、1651頁と同じものが書かれている（４項目）

1650頁には、1652頁と同じものが書かれている（４項目）

これは、1648－1649頁の丁を書写する際にその丁を飛ばして、次の丁（1650－1651頁）を筆写し、１丁半（３頁）分進んだところで誤りに気づいて1651頁から正しい対応に戻したものであろう。1648頁と1649頁の元の項目（6219-6226）は別の本によって補い、1650頁は1648頁の項目によって置き換える必要がある。

(2) 第２巻1899－1901頁（7165-7171）のモンゴル語の訳語は、次のように他の言語（満洲語、漢語等）の項目と対応がズレている。

1899頁の３行目（7165）に [illegible] とあるのは、[illegible] の誤。[illegible] は次行（7166）に入るべき訳語であるが、ひとつの項目に連ねて書かれている。そのため、同頁の４行目（7166）から1901頁の１行目（7171）までのモンゴル語の訳語（７項目）には、それぞれ後続する直後の項目（行）の訳語が先取りして書かれている。

(3) 第２巻1908－1913頁（7200-7220）のモンゴル語の訳語は、次のように他の言語（満洲語、漢語等）の項目と対応がズレている。

1908頁の３行目（7200）に [illegible] とあるべきところが [illegible] となっている。これは、次の項目の訳語である。こうして、1908頁の３行目（7200）から1913頁３行目（7220）までのモンゴル語の訳語（21項目）には、それぞれ後続する直後の項目（行）の訳語が先取りして書かれている。

(4) 第２巻3006－3009頁（11310－11322）のモンゴル語の訳語は、次のように他の言語（満洲語、漢語等）の項目と対応がズレている。

3006頁の４行目（11310）に [illegible] とあるべきところが [illegible] となっている。これは、次の項目の訳語である。こうして、3006頁の４行目（11310）から3009頁の４行目（11322）までのモンゴル語の訳語（13項目）には、それぞれ後続する直後の項目（行）の訳語が先取りして書かれている。

(3)と(4)は、ひとつの訳語が脱落したために、それ以降の訳語の対応がひとつずつズレた誤りである。このように、誤記がモンゴル語の項目だけに生じていることを見れば、書

写の際にそれぞれの言語を筆写する担当者が違っていたと推定することができる。つまり、モンゴル語も含めて、それぞれの言語は他の言語とは独立に筆写された可能性が浮かび上がる。

2.『五体清文鑑』と他の清文鑑の語彙項目の構成

『五体清文鑑』の満洲語の見出し語のほとんどは、先行する『増訂清文鑑』および『四体清文鑑』と共通している。見出し語の構成と並んで、正編32巻補編4巻という巻の構成および36部292類という語彙の分類体系も、これら3種の清文鑑に共通である。

それぞれに含まれている言語について見ると、『増訂清文鑑』は満洲語と漢語の2言語対訳辞典であり、『四体清文鑑』は満洲語と漢語の他にモンゴル語とチベット語を加えた4言語が含まれている。『五体清文鑑』は、これらの言語をすべて含んでいるので、極めて僅かな違いを除いて、『増訂清文鑑』と『四体清文鑑』に収録されているすべての言語のすべての語彙は、『五体清文鑑』に含まれているとみなすことができる。

しかし、僅かとはいえ、これら3種類の清文鑑の語彙の構成に異同があることもまた事実である。ここでは、その違いの詳細を明らかにしておく。

『四体清文鑑』と『五体清文鑑』の語彙項目の違い

『四体清文鑑』の本文は、満洲語・チベット語・モンゴル語・漢語の4言語の単語が縦に1行に並び、1頁に4行の体裁となっている。こうした1行に1項目、1頁に4行を配する体裁は『五体清文鑑』でも全く同様である。『五体清文鑑』で新たに付け加えられたのは、言語ではウイグル語であるが、このほか満洲文字によるチベット語の文語と口語の2種類の発音表記、満洲文字によるウイグル語の発音表記である。

『四体清文鑑』と『五体清文鑑』の語彙項目を比較すると、『五体清文鑑』にはあるが『四体清文鑑』にはないものが4項目ある[13]:

(1) 第9巻武功部2畋獵類3の fenfuliyer tuheke「獸中傷口著地倒狀」(3851)

(2) 第16巻人部7疼痛類2の holhon gocimbumbi「腿肚轉筋」(8445)

(3) 第22巻産業部打牲器用類3の horhotu「打虎豹大木籠」(11548)

(4) 第31巻獸部獸類3の šolonggo mafuta「二歳鹿」(15981)

今西［1966：156］は、『四体清文鑑』と『五体清文鑑』との語彙項目の差異を3語として(4)(3)(1)の順に挙げている。(1) の漢語訳に「一箭即倒狀」とあるのは奉天本であり、北京本では上のように「獸中傷口著地倒狀」となっている。(2) は見落とされている。

繰り返せば、これ以外はすべて『四体清文鑑』と『五体清文鑑』の語彙項目は共通とみなすことができる。従って『五体清文鑑』で新たに付け加えられたウイグル語は別として、満洲語、チベット語、モンゴル語、漢語に関しては、『五体清文鑑』の表記を確認するのに『四体清文鑑』を利用することができる。

『増訂清文鑑』と『五体清文鑑』の語彙項目の違い

『増訂清文鑑』の本文は、見出し語に満洲語と漢語が並べられているだけでなく、満洲語には三合切音方式[14]による漢字で、また漢語には満洲文字で発音（読み方）が記されている。さらに満洲語による語釈が付されていることから、その体裁は先に見た『五体清文鑑』や『四体清文鑑』とは著しく異なっている。

今西［1966：138］は、『四体清文鑑』や『五体清文鑑』と『増訂清文鑑』の語彙項目の違いは「僅かに10語内外の増加変更が見られるのみである」としているが具体的な差異は示されていない。『増訂清文鑑』と『五体清文鑑』を比較すると、『五体清文鑑』にあって『増訂清文鑑』にない語彙項目は次のように19ある。

*(1) 第9巻武功部2畋獵類3の fenfuliyer tuheke「獣中傷口著地倒狀」(3851)
(2) 第9巻武功部2軍器類7の unun uše「背鎗帶子」(4084)
(3) 第9巻武功部2軍器類7の cirgeku「鎗探子」(4086)
(4) 第9巻武功部2軍器類7の hengkileku「鎗機子」(4087)
(5) 第9巻武功部2軍器類7の miyalikū「火藥葫蘆管子」(4088)
(6) 第9巻武功部2軍器類7の kūwaca i beri「烘藥葫蘆口」(4089)
(7) 第9巻武功部2軍器類7の šan「火門」(4090)
(8) 第10巻人部1人倫類1の da sekiyen mafa「始祖」(4481)
(9) 第10巻人部1人倫類2の jidere omolo「來孫」(4568)
(10) 第10巻人部1人倫類2の hafungga omolo「昆孫」(4569)
(11) 第10巻人部1人倫類2の ineku omolo「仍孫」(4570)
(12) 第10巻人部1人倫類2の tugingga omolo「雲孫」(4571)
(13) 第13巻人部4怕懼類1の durbembi「衆人驚」(6866)
(14) 第14巻人部5行走類1の emu fehun「跬步」(7480)
*(15) 第16巻人部7疼痛類2の holhon gocimbumbi「腿肚轉筋」(8445)
*(16) 第22巻産業部打牲器用類3の horhotu「打虎豹大木籠」(11548)
(17) 第27巻食物部1飯肉類2の dekdenggi「浮油」(14118)
(18) 第28巻食物部2澆涶類の doolabumbi「使倒水」(14812)
*(19) 第31巻．獣部．獣類3の šolonggo mafuta「二歳鹿」(15981)

上のリストの中で＊印をつけた(1)(15)(16)(19)の4項目は、先に見たように、『四体清文鑑』にも収録されていないものである。上の19項目の出現位置を見ると、(2)～(7)および、(9)～(12)のように出現位置が類としてまとまっている項目もあるが、それ以外の項目は各所に散在している。

上の場合とは逆に、『増訂清文鑑』にあって『五体清文鑑』にないものが2項目ある：

(1) 第10巻人部1人倫類2の duici jalan i omolo「四代孫」
(2) 第10巻人部1人倫類2の sunjaci jalan i omolo「五代孫」

さらに、『増訂清文鑑』と『五体清文鑑』で満洲語が異なるものが3項目ある[15]：

	『増訂清文鑑』	『五体清文鑑』
第4巻設官部2臣宰類13	gajarci	yarhūdai「嚮導」(1477)
第10巻人部1人倫類2	jai jalan i omolo	dabkūri omolo「曾孫」(4566)
同上	ilaci jalan i omolo	nemeku omolo「元孫」(4567)

ちなみに、『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』に収録されている項目の数は13,835で、『五体清文鑑』より4,836項目少ないが、それらは1項目を除いて、すべて『五体清文鑑』に収録されている。『五体清文鑑』に収録されていない1項目は、第6巻第17丁裏にあるgiyarire boode tucimbi「公主下嫁」である。

3.『満和辞典』と『五体清文鑑』

羽田亨編『満和辞典』(京都帝国大学満蒙調査会、1937)は、日本の満洲語学習者が必ず参照・利用し、その恩恵を蒙ってきた満洲語の辞典として名高い。1972年に国書刊行会より復刻版が刊行され、現在も満洲語の学習に利用されることは少なくないと考えられる。この辞典は、「序言」(Ⅰ－Ⅳ頁)および「凡例」(Ⅴ－Ⅵ頁)に見るように、『増訂清文鑑』『四体清文鑑』『五体清文鑑』および『清文彙書』の満洲語を見出し語として、Möllendorff [1892] の方式によってローマ字転写し、それをアルファベット順に配列したもので、満洲語の見出し語に続いて、日本語の訳、出現位置、および漢語訳を付している。出現位置は、「巻数」と「類別」であるが、これらは『増訂清文鑑』『四体清文鑑』『五体清文鑑』に共通している。

本辞典の見出し語を見ると、『五体清文鑑』のすべての項目に加えて、「増訂清文鑑續入新語篇」(「續」と注記されている)の約30語、「増訂清文鑑二次續入新語篇」(「續2」と注記されている)の約120語、および清文鑑に未収で『清文彙書』にあるもの(「彙」と注記されている)約2,890語が収録されており、見出し語の総計は約21,700にのぼる。

満洲語の学習者・研究者に限りない便宜を供してきた『満和辞典』であるが、そこに誤記・誤植が含まれていることがつとに山本 [1961] によって指摘されている。山本氏は、『満和辞典』の誤りを、ⅰ)見出語の誤植・誤記・錯簡、ⅱ)「清文鑑」の巻数、則数の誤記、ⅲ)訳語の誤り、に分けて若干の例を示している。このうち、「見出語の誤植・誤記・錯簡」については、

> 印刷上よくある誤植の校正漏れがある他に、満洲字を翻字する場合の不注意から生じた誤記が相当あり、又更にそれが誤った位置に配列されている場合がある。

と述べた上で、次のような例を示している。

1. p. 286. laifū から laifūwa までの５語の f は何れも h の誤り；
2. p. 443. uheri saraci は uhei の誤りでその項に入るべきもの；
3. p. 285. kūwas his は kis の誤りで両者とも同一見出語内に入るべきもの；
4. p. 248. jili...2....〔12勇健：結実〕は p. 134. fili の３. として掲げるべきもの；
5. p. 116. ergeletei はとんでもない位置に入れてある；
6. p. 399. šelemo は 原本に šelembi とあるべきものが（i）が見えないためにこれを読み誤ったもの；

その他にも、a–e, u–o, k–h の誤りが見られる。

これ以外の誤記の詳細については明らかになっていないので、筆者が確認したものを以下に示すことにする。

まず、誤記・誤植以前に、『五体清文鑑』（『四体清文鑑』『増訂清文鑑』も同様）の見出し語で、『満和辞典』に収録されていない項目が存在することを指摘しておきたい。それらを『満和辞典』の体裁に倣って字母順に列挙すれば以下の通りである[16]。

『五体清文鑑』にあって『満和辞典』に採録されていないもの（15項目）：

(1) adabuha wesimbure bithei kunggeri 各省から送り来った副本に記号を入れて内閣に送る等の事務を掌る処〔補２．衙署五：副本科〕
(2) bargiyaha temgetu i kunggeri 処方からの上奏文に付けて送って来る文書に上奏収受の旨の證記を認めて送り返すなどの事務を掌る処〔補２．衙署五：批迴科〕
(3) carure boo 餑餑（efen）の膳を支度する処。内閣にあり〔補２．衙署五：炸食房〕
(4) hesei bithei kunggeri 上旨を複写して収貯し、伝達する等の事を掌る処。通政司に属す〔補２．衙署五：旨意科〕
(5) ibebume wesimbure kunggeri 各省から送り来った上奏を収めて内閣に送り上覧に供する手続きを行う処〔補２．衙署五：進呈科〕
(6) jingkini wesimbure bithei kunggeri 各省から送り来った正本を点検する等の事務を掌る処。通政司に属す〔補２．衙署五：正本科〕
(7) kimcime baicara falgangga 各役所がそれぞれの所で用いた銀両の総目算出などの事項を査察する処。各役所ごとにある〔補２．衙署五：稽察所〕
(8) menggun namun i teherebuku i kunggeri 各役所の銀庫の出納を掌る処。各役所ごとにある〔補２．衙署五：銀庫平科〕
(9) musebumbi〔弓身を〕湾曲する。弧形状にする〔９．武功二：使摺身〕
(10) nure i kūwaran 祭祀筵宴などに用いる酒を造る処〔補２．衙署五：酒局〕
(11) šakšaha sele 轡の両側の鏡板。おもがいを繋ぐ金具〔９．武功二：腮花〕
(12) uheri kunggeri 一切の文書を収貯し記録に留めておくことを掌る処〔補２．衙署五：總科〕

(13) uksun be kadalara yamun i baita be kimcime baicara yamun 宗人府の一切の事項を監察し、皇族に対する下賜銀の額を調査する等の事務を承弁する役所〔補2．衙署五：稽察宗人府事務衙門〕

(14) wecere tetun i kunggeri 諸祭の器具を増添したり整理したりなどの事務を掌る処〔補2．衙署五：祭器科〕

(15) wesimbure kunggeri 一切奏摺の処理を掌る処〔補2．衙署五：啟奏科〕

これらを原本の出現順に並べてみると興味深いことが分かる。これらのうち、(9)と(11)は他の項目と離れたところに位置しているが、それ以外の13語は原本で連続している。具体的には、それらは北京影印本『五体清文鑑』(民族出版社、1957) の4688, 4689, 4690, 4691の4頁である。『満和辞典』を編集する際に、これらの頁の資料が脱落したものと考えられる[17]。

(9)〔9．武功二：使摺身〕	− 4135	(1. 1095-2)
(11)〔9．武功二：腮花〕	− 4295	(1. 1137-4)
(13)〔補2．衙署五：稽察宗人府事務衙門〕	− 17595	(3. 4688-1)
(6)〔補2．衙署五：正本科〕	− 17596	(3. 4688-2)
(1)〔補2．衙署五：副本科〕	− 17597	(3. 4688-3)
(4)〔補2．衙署五：旨意科〕	− 17598	(3. 4688-4)
(5)〔補2．衙署五：進呈科〕	− 17599	(3. 4689-1)
(2)〔補2．衙署五：批迴科〕	− 17600	(3. 4689-2)
(15)〔補2．衙署五：啟奏科〕	− 17601	(3. 4689-3)
(14)〔補2．衙署五：祭器科〕	− 17602	(3. 4689-4)
(3)〔補2．衙署五：炸食房〕	− 17603	(3. 4690-1)
(8)〔補2．衙署五：銀庫平科〕	− 17604	(3. 4690-2)
(7)〔補2．衙署五：稽察所〕	− 17605	(3. 4690-3)
(10)〔補2．衙署五：酒局〕	− 17606	(3.4690-4)
(12)〔補2．衙署五：總科〕	− 17607	(3.4691-1)

これらの欠落は、先に見た京都大学所蔵の奉天本写真原版の欠落、あるいは東洋文庫複製本の落丁とは、一切関係ない。

次に、『五体清文鑑』と照合した『満和辞典』の見出し語の誤記・誤植を山本〔1961〕の指摘した1．～3．も含めて、一覧で掲げる。山本氏の指摘した6．は「原本」が『清文彙書』なので、以下には含まれていない。128項目ある。

『満和辞典』の見出し語の誤記・誤植[18]

頁	誤	正
1b	abka be ginggulere yamun i	abka be ginggulere yamun i

	ilihi hafan	ilhi hafan
4a	acabun i ulhun	acabun i fulhun
5a	ada facikū	ada ficakū
7a	ahantumhi	ahantumbi
9b	aiman i elbire hafan	aiman i elbire dahabure hafan
10b	aisha	aisha cecike
10b	aisilabumai	aisilabumbi
11a	aisin ilhangga sakū	aisin ilhangga sukū
14b	alaha uihe beri	alha uihe beri
23a	anahūjan	anahūnjan
29a	atahasi	antahasi
30a	ayan malanggū inenggi	ayan malanggū nimenggi
38a	behei namu	behe i namu
61a	cakūltu cecike	cakūlutu cecike
69b	cobdaha sungkeri ilha	cobdaha šungkeri ilha
71a	cooha huwekibure temgetu	cooha huwekiyebure temgetu
82a	darakūlambi	dorakūlambi
85a	debtelin i bulgiyen	debtelin i burgiyen
100b	dur seme imjembi	dur seme injembi
102a	dzanselebumbi	dzanselabumbi
102a	dzanselembi	dzanselambi
105a	edkirakū	edekirakū
106b	efun belhere ba	efen belhere ba
108b	ekiyebu	ekiyembu
109b	eldemu i etehe poo	erdemu i etehe poo
115a	enggelekū	enggeleku
122b	faidan be tuwacihiyara hafan	faidan be tuwancihiyara hafan
124b	falanggū faihan	falanggū faifan
127b	faššan baicara bolgobure fiyenten	faššan be baicara bolgobure fiyenten
128b	feise mooi kunggeri	feise moo i kunggeri
129b	felere ataha	felere antaha
130b	feningge	feingge
136b	fiyancihihiyan	fiyancihiyan
145b	fuliyentu	fulgiyentu
150b	fusi baharakū	fusi baharahū

153a	gaihahu konggoro	gaihahū konggoro
154b	galai hulu	galai huru
157b	gashiyandumbi gasihiyanumbi	gasihiyandumbi gasihiyanumbi
165b	gida mukšen	gida mukšan
169a	gioingge jafūdai	gioingge jahūdai
177b	gu dengjen ilha	gu dengjan ilha
179b	gulmahūn	gūlmahūn
184a	gūlugala	gūlu gala
184b	gūrgi foyo	gūlgi foyo
186b	gʻodarga	gʻodargʻa
188a	hadaha usin	hadaha usiha
198b	hederekū	hedereku
200a	helmen gabtaku	helmen gabtakū
202a	hese buhengge	hesebuhengge
204b	hionghiori gasha	hionghioi gasha
207a	hiyan i fanšakū	hiyan i fangšakū
210a	holing	holin
213b	hošo safambi	hošo sahambi
222b	hūwašan doose kunggeri	hūwašan doose i kunggeri
228a	ilenggū	ilenggu
231a	imiyara sabintungga kiru	imiyara sabintungge kiru
232b	ingali	inggali
232b	injekšembi	injekušembi
236b	jadalahabi	jadahalahabi
237a	jafahan isibure kunggeri	yafahan isibure kunggeri
245a	jelmin imengi	jelmin imenggi
247b	jiha i kemuneku	jiha i kemneku
250a	jirmutu suru	jirumtu suru
253b	jorho jordoho	jorho fodoho
256a	julangga hehe	jalangga hehe
256a	julen arambi	julen alambi
257a	jung jeng diyan i nomun hūdara ba	jung jeng diyan i nomun hūlara ba
259a	juru usiha	juru sirha
260a	juwan booi da	juwan boo i da
260b	juwanka	juwangka

263b	kaksaka	kaksaha
275a	kiyan cin men i hiya	kiyan cing men i hiya
276a	kiyooha	kiyooka
276b	kofen suje	kofon suje
285a	kūwas his	kūwas kis
286b	laifū	laihū
286b	laifūn	laihūn
286b	laifūšambi	laihūšambi
286b	laifūtu	laihūtu
288b	lamun samusu	lamun samsu
293b	lokdo lokda	lokdo lakda
297a	maksiri mahatun	maksisi mahatun
312a	mooi kemuneku	mooi kemneku
317a	muke hūšakū	muke hūšahū
317b	mekelu ilha	mukelu ilha
318b	mumuri meitehe	mumuri mentehe
322b	namakū loho	namkū loho
323b	nanturambi	nantuhūrambi
328a	nicuheri šurdehen	nicuhei šurdehen
328a	nicuheri moo	nicuhei moo
329b	nimanggi wenke	nimanggi wengke
330a	nimecuke koronggo poo	nimecuke horonggo poo
333b	niowanggiyan turun cooha	niowanggiyan turun i cooha
335b	niyalhoca	niyarhoca
338a	niyekinahabi	niyakinahabi
340a	nonggari funiyesun	nunggari funiyesun
343b	oifu	oifo
350a	oyonde isinaha	oyon de isinaha
351a	pingki alin	pingpi alin
357a	sajingga deo	šajingga deo
361b	se salaha	se selaha
361b	sebderibumbi	sebderilembi
364a	seksen banjikabi	seksen banjihabi
366b	sengkisi hiyan	sengkiri hiyan
367b	serguwe cirku	serguwen cirku

390a	suraku	surakū
390a	sure hihan	sure hiyan
391a	susukiyembi	sesukiyembi
397b	šanyan kongolo	šanyan konggolo
397b	šanyan siširgan	šanyan sišargan
400b	šerke	šerhe
403b	šu be badarambure temgetu	šu be badarambure temgetun
408a	šurteku yoo	šurtuku yoo
422b	temun cecike	temen cecike
424a	tergin	terin tarin
424a	tesu ba i eJeletu	tesu ba i eJeltu
424b	tetun deijire sele weniyere kunggeri i bodoloro boo	tetun deijire sele weniyere kunggeri i bodoro boo
433a	tukšen	tukšan
437b	tusa arame iktambure cala	tusa arame iktambure calu
439a	tawame kadalara hafan	tuwame kadalara hafan
443b	uheri saraci	uhei saraci
446b	ula šušu	ula šusu
452b	urgesen	urgešen
457b	uyunggere ibereleme miyoocalambi	uyunggeri ibereleme miyoocalambi
464b	weilengge niyalma kadalara hafan	weilengge niyalma be kadalara hafan
473a	yarudai	yurudai
473a	yarume yarume	yarume yurume
477b	yongkiri inenggi	yongkiri inggali

以上が『満和辞典』における見出し語のローマ字転写誤記である。

次に、『満和辞典』の見出し語ローマ字転写が奉天本の原本に合致しているが、『増訂清文鑑』と異同があるものをいくつか指摘しておく。

『満和辞典』(奉天本)と『増訂清文鑑』で満洲語の表記の異なるもの:

頁	『満和辞典』(奉天本)	『増訂清文鑑』
49a	bolgangga moo	bulgangga moo
49b	bolgosu	bolhosu
303b	meitehe	mentehe
319a	munjimbi	mujimbi
332b	niorombi	niorumbi

353a　sabda　sabta

これらについては、さらに『五体清文鑑』の異本、および『四体清文鑑』『三合切音清文鑑』等との比較校訂を行う必要がある。

4.『五體清文鑑譯解』について — 特にモンゴル語の表記について

田村實造・今西春秋・佐藤長共編『五體清文鑑譯解』（京都大學文學部内陸アジア研究所、1966）は、奉天本『五体清文鑑』に基づき、全言語のローマ字転写と漢語の翻刻だけでなく日本語の訳解を付して項目別に配列した上巻と、それぞれの言語ごとの全項目索引の下巻（総索引）からなる資料である。ここでは、東洋文庫複製本の乱丁・落丁はすべて補訂されており、全体に極めて周到かつ精緻に編集された信頼できる『五体清文鑑』のテキスト版となっている。

同書は『五体清文鑑』を利用するに際しては、この上なく便利で欠かすことのできない資料であるが、モンゴル語のローマ字転写に関して独自の方式を採用している点は注意を要する。同書におけるモンゴル語のローマ字転写形は、「満洲文字による標音」つまり満洲文字によるモンゴル語の発音表記を Möllendorff［1892］方式によってローマ字転写したものである。しかし、「満洲文字による標音」は『御製五体清文鑑』自体には含まれておらず、それらは『三合便覧』所載のもの、および京都大学所蔵の『御製四体清文鑑』の朱筆書き入れによっているという（同書「凡例」: xiii）。

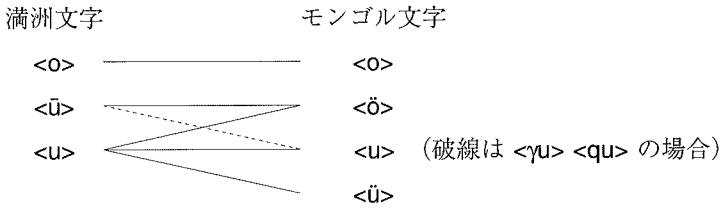
したがって、同書のモンゴル語ローマ字転写形を利用する際には、それらが『五体清文鑑』に存在しない「満洲文字による標音」によっていることと、「満洲文字による標音」方式の特徴について理解しておく必要がある。モンゴル語をローマ字転写するやり方としては、Poppe［1954］や Grønbech, Krueger［1955］の方式がよく知られているが、満洲文字表記のモンゴル語を介して行うやり方は決して一般的ではなく、誰にも簡単に利用できる類のものではない。

満洲文字によるモンゴル語表記は、『三合便覧』だけでなく、乾隆45（1780）年序の『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』、および乾隆８（1743）年序の「満蒙合壁文鑑」にも見られる。その表記の特徴については、『三合便覧』に関しては呼日勒巴特尔［2005；2006］に、『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』に関しては呼日勒巴特尔［2004］と栗林・呼日勒巴特尔［2006］に、また乾隆８（1743）年序「満蒙合壁文鑑」に関しては栗林［2008］に紹介と解説がある。それらの清文鑑と『三合便覧』は収録されている項目の数は異なるものの[19]、満洲文字による表記の方式と特徴は基本的に同じものと見なすことができる。

満洲文字によるモンゴル語表記は、口語の発音をそのまま写したものではなく、基本的にはモンゴル文字で表記された文語の読み方を、満洲文字の綴り字規則に従って表記したものと考えられる。大体において、モンゴル文字の１字１字を満洲文字に置き換えている

のであるが、それらの対応が必ずしも1対1になっていないことと、モンゴル文字と満洲文字の表記にズレが見られる場合がある（おそらく、モンゴル文字の字面とは違う読み方を反映している）ことは、言語の特徴としては興味深い情報であるが、実用的な使用に最適とは言い難い。

モンゴル文字と満洲文字の表記が1対1で対応していない代表的な例として、円唇母音を表記する場合を挙げることができる。モンゴル文字の4つの母音字 <o> <u> <ö> <ü> に対して満洲文字の3つの母音字 <o> <u> <ū> が対応しているが、対応関係は概略的に次のように表すことができる[20]。



これらは、満洲文字の種類と正書法の制約により、必ずしも発音（読み方）を反映していない場合もありうる。こうした場合、満洲文字の表記から元のモンゴル文字を推定しなくてはならない。

次は、モンゴル文字の字面と満洲文字の表記にズレが見られる例である[21]。

tenggeri（1）－ （tngri）「天」

ūjuk（2937）、ujuk（2938）－ （üsüg）「文字」

isun（3180）－ （yisün）「九」

iren（3196）－ （yeren）「九十」

cicik（12206）－ （čečeg）「花」、等。

特にモンゴル文字と、満洲文字の表記の違いが目立つのは名詞類の格語尾である[22]。中でも著しい違いが見られるのは属格形と対格形の語尾である。表2．と表3．にモンゴル文字に対応する満洲文字表記を示す。

表2．モンゴル語属格語尾の満洲文字表記

語幹末の字種	モンゴル文字	満洲文字（ローマ字転写）
母音字		yen
<n>		nu
<ng>		gun
他の子音字		un（語幹と繋げて書かれる）

例：（右側にモンゴル文字とローマ字転写を付す）

tenggeri yen oyodal（16）－ （tngri-yin oyudal）「天の河」

usun nu sang（772）－ （usun-u sang）「海洋」

kuriyeleng gun daruga（4392）－ （küriyeleng-ün daruγ_a）「園の長」

goolun cadu（886）－ （γoul-un čadu）「河の向こう」

表３．モンゴル語対格語尾の満洲文字表記

語幹末の字種	モンゴル文字	満洲文字（ローマ字転写）
母音字		gi
<g> <γ> <ng>		
<n>		ni
他の子音字		i（語幹と繋げて書かれる）

例：（右側にモンゴル文字とローマ字転写を付す）

sanaga gi tejigemui（5379）－ （sanaγ_a-yi teǰige=müi）「志を養う」

uruk gi tejigemui（5378）－ （uruγ-i teǰige=müi）「親族を養う」

jun ni bodokci tusimel（1326）－ （ǰun-i bodu=γči tüsimel）「夏官正」

namuri bodokci tusimel（1328）－ （namur-i bodu=γči tüsimel）「秋官正」

モンゴル語の満洲文字表記ローマ字転写から、このような元のモンゴル語の綴りを推測するためには、満洲文字表記の性格と特徴を明らかにしなければならない。

注

1）「ウイグル語」は、アラビア文字で書かれたチュルク系の言語を指す。江［1969］は「チャガタイ・チュルク語」、庄垣内［1979］は「新ウイグル語」と呼んでいる。

2）黄［1957（1998）］、今西［1966］等をもとに作成した。項目数は筆者の調査による。

3）それぞれ「序」に記されている年号による。

4）漢語の題名は『 』（二重カッコ）に入れ、漢語の題名の無いものは「」（カッコ）に入れた。

5）略語は次の通り：「満」＝満洲語、「蒙」＝モンゴル語、「漢」＝漢語、「蔵」＝チベット語、「維」＝ウイグル語。

6）「総綱」は、本文の見出し語を字母順に配列した索引のことである。

7）春花［2006：594］によれば、乾隆41（1776）年に后永堪等の編により、同清文鑑の「総綱」８巻が刊行された。

8）【 】内は引用者による補い。以下同様。

9）東北大学附属図書館所蔵本を利用した。

10）右側の数字は、それぞれに対応する北京影印本『五体清文鑑』（民族出版社、1957）の頁を表す。またカッコ内の数字は、その頁にある項目の通し番号であり、『五體清文鑑譯解』（京都大學文學部内陸アジア研究所、1966）の「語彙番號」と同じ。

11）「この点」というのは、「原本の忠実な復元」をさしている。

12) カッコ内の数字は項目の通し番号。

13) 満洲語と漢語訳のみを示す。カッコ内は項目の通し番号。

14) 「三合切音方式」は、最大３個の漢字の組み合わせによって満洲語のひとつの音節の発音を表すやり方である。

15) 漢語の訳語は共通である。

16) 日本語の訳は『五體清文鑑譯解』(京都大學文學部内陸アジア研究所、1966) によっている。

17) 右側の数字は、項目の通し番号。カッコ内の数字は、北京影印本『五体清文鑑』(民族出版社、1957) の巻数、頁、頁内における項目の順番を表す。たとえば、「1.1095-2」は第１巻の1095頁の２番目の項目であることを表す。

18) 左端の数字は頁数、アルファベットは左欄 (a) と右欄 (b) を表す。『満和辞典』の見出し語は大文字で始まっているが、すべて小文字にした。本文に述べているように、これらは『五体清文鑑』収録語彙の範囲での照合である。

19) 今西 [1966：151-152] によれば、『三合便覧』の収録語彙数は『四体清文鑑』と大体同じである。

20) 栗林 [2008：17] を参照。

21) カッコ内の数字は項目の通し番号。右側にはもとのモンゴル文字と Poppe [1954] によるローマ字転写形、意味を示した。

22) 満洲文字による格語尾の表記については呼日勒巴特尓 [2005]、栗林 [2008：17-19] を参照。

参考文献 (欧文、和文、中・蒙文の順)

Grønbech, Kaare and Krueger, John R. (1955) *An introduction to classical (literary) Mongolian,* Otto Harrassowitz.

Möllendorff, P. G. von (1892) *A Manchu Grammar, with Analyzed Texts*, American Presbyterian Mission Press.

Poppe, Nicholas (1954) *Grammar of Written Mongolian*, Otto Harrassowitz.

Poppe, Nicholas, Hurvitz, Leon, Okada, Hidehiro (1964) *Catalogue of the Manchu-Mongol Section of the Toyo Bunko*, The Toyo Bunko & The University of Washington Press.

今西春秋 (1966)「清文鑑――単体から５体まで」朝鮮学会『朝鮮学報』第39・40輯、121-163+11-１頁。

栗林均、呼日勒巴特尓編 (2006)『「御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑」モンゴル語配列対照語彙』東北大学東北アジア研究センター。

栗林均 (2008)「モンゴル語資料としての『清文鑑』」東北大学東北アジア研究センター『東北アジア研究』第12号、１－34頁。

江実 (1969)「満州語，蒙古語，チャガタイ・チュルク語 (回語) の語彙相関々係について――五体清文鑑を基礎にして――」日本言語学会『言語研究』第54号、49－62頁。

庄垣内正弘 (1979)「『五体清文鑑』18世紀新ウイグル語の性格について」日本言語学会『言語研究』第75号、31－53頁。

田村實造、今西春秋、佐藤長共編 (1966)『五體清文鑑譯解 (上・下巻)』京都大學文學部内陸アジ

ア研究所。

羽田亨編（1937）『満和辞典』京都帝国大学満蒙調査会（復刻版：国書刊行会、1972）。

山本謙吾（1961）「満洲語学への二三の寄与——上原久著「満文満洲実録の研究」を中心として——」『東洋学報』第43巻４、01－023頁。

春花（2006）「清代满蒙文〝分类词典〞的发展演变」故宫博物馆，国家清史编纂委员会编『故宫博物院八十华诞暨国际清史学术研讨会论文集』592－602页.

黄明信（1957：再版1998）「有關五体清文鑑的一些历史材料」『五体清文鑑』（民族出版社）下冊末尾、１－７页.

呼日勒巴特尔（2004）「《御制满珠蒙古汉字三合切音清文鉴》蒙古语研究《[illegible]》[illegible]（《qaγan-u biči=gsen manǰu mongγul kitad üsüg γurban ǰüil-ün ayalγu neyile=gsen toli bičig》-ün mongγul kelen-ü sudulul）」『内蒙古大学学报』2004年第２期、１－41页。

呼日勒巴特尔（2005）「用满文表写蒙古语格附加成分简述 [illegible]（manǰu üsüg-iyer mongγul kelen-ü teyin ilγal-i temdegle=gsen bayidal-un tuqai-du）」『内蒙古大学学报』2005年第３期、１－４页。

呼日勒巴特尔（2006）「满文标写蒙古语的特点 [illegible]（manǰu üsüg-iyer mongγul kelen-ü abiy_a-yi temdegle=gsen ončaliγ-un tuqai ögüle=kü ni）」『内蒙古大学学报』2006年第５期、１－10页。

（KURIBAYASHI Hitoshi）